関わるな、私はただの、JKだ。

愛と勇気の狩人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

普通に憧れる少女、白鉄猟来（しらがねりょうこ）は腕利きの狩人（ハントレス）だ。

彼女が夢見た学校生活。ついに自分も女子高生となれると知った彼女はテンションを上げたが――そこはただの学校ではなく。

そして、彼女の”普通”は、やや狂っていた。

目　次

ハッピーラッキー宜しくね？ ―――― 1
ちょっとの普通は好きくない？ ―――― 5

ハッピーラッキー宜しくね？

私は平和が好きだ。何ごともなく、退屈すら覚えるこの時間が堪らなく幸福に思えて仕方がない。誰にも害されず眠れる毎日が好きだ。気兼ねなく裸になれる風呂場が好きだ。他愛もない会話をＢＧＭに歩く通学路が好きだ。何の変哲もない丸いお月様が好きだ。

何も変わらない。変わったとしても、全てを台無しにする事はない。欠伸は幸福のファンファーレ。私は日々の退屈を愛してやまない。

窓際で穏やかな眠気に誘われる時間は、授業内容を板書していく時間は、自習の時間は。私が望んだものはここにある。

――私は、ただの女子高生でありたい。

街行く人々、浮かない顔をしている人々は口々に言う。幸せが逃げていくと。……幸せは逃げるものじゃない、ただ望む幸せのレベルが上がってしまっただけなのだと、私は思う。

１人起きた薄暗い部屋。自分の声だけが聞こえる空間。寂しいとは思わない、むしろ自由で心地いい。誰にも邪魔されない眠りから訪れる朝は格別だ。

まずテレビを付けて、朝のニュース番組を横目に歯を磨く。

「……お、今日の運勢一位だ」

些細な喜びを胸にしまい、食パン２枚をトースター入れ、電気ケトルで湯を沸かす。朝ご飯は体の基礎、忘れてしまうと後に響く。私の知っている事では数少ない真っ当な教えだ。

まだ部屋は薄暗い、カーテンを開いて光を入れる。人工の光よりも、自然の光の方が目覚めに良い。春先の穏やかな陽光に翳した指先が暖かい。

何も変わらない、朝のひと時。求め過ぎなくても、欲しい物は全てある。安全な衣食住に、変えられない景色、変えられない街並み。そ

のどれもが、私にとってはかけがえのない存在だ。
朝ご飯を用意して、いただきますをする。その後は銀の食器を片付け着替えに入る。昔からご飯も着替えのタイミングも不定期だったけど、今はこうして決まった時間に出来る。それが喜ばしい。
伸びかけてきた茶髪に軽く櫛を通し、髪を色々とセットして、銀色の小さなバレッタで髪を少しまとめる。どこにでもいる普通の少女の見た目、完璧だ。
「ふふん、どこからどう見ても今の私は在り来りな色恋にうつつを抜かしていそうな女子高生だ。多分」
女子高生の平均値、なんてものは測れない以上なんとも言えないが、それでも普通には拘りを持ちたい。かつて私が居た場所は異常者蔓延る魔境、異常でなければ生きられない世界だった。だからこそ普通を尊ぶ。
この為に実家にあった雑誌でコスメやファッションについて勉強して来たし、会話のネタはある、筈。
私はタンスの中から暗い木目の箱に入った鈍色の回転式拳銃を手に取り――鞄に入れようとして、辞めた。
「違う、私は普通になるんだ」
普通の女子高生は鞄に銃は入ってないし、銀のナイフなんて持ち歩かないし、古びた直剣なんてもっての他だ。
今更、手放した所で惜しくもなんともない、ロクでもない思い出の詰まった代物でしかない。
「よし、行ってきます」
呪いを振り切り、制服姿の私は、鞄を持って小走りで学校へ向かう。
今日、私は普通になれる。馬鹿みたいに――そう疑いもせずに。

「ねえ、転校生ってどんな子かな？」
「分かりませんが……常識的な方が良いかと」
「アリスちゃんは相変わらずだね」

「神楽坂澪（かくらざかみお）、貴女はもっと常識を弁えるべきです」
朝の教室には、異様な喧騒が満ちていた。それもその筈、今日は転校生がクラスメイトになるその日であった。誰もが期待に胸躍らせ、来る転校生の人となりを考える。その中にこの２人は居た。
一見すると銀髪ロングと黒髪ポニーテールの少女だが、その背景は異質も異質。"教会"から日本に派遣された武装祓魔師シスター・アリス。"社"よりその目付役として付けられた破魔士神楽坂澪。
２人がこの学校、公立八千ケ丘（やちがおか）高等学校に来ている理由は、ここと、この学区が人類と異種族……古くは怪異と呼ばれる（現在は差別用語に当たる）存在の密約により定められた特区である為だ。
緊急時には、この２人が事態に対処し、場合によっては武器の使用並びに異種族への殺傷すら認められると言うのである。非常に強力な権限を持つ故に、普段は２人が相互監視を行い、武器の使用に関しても互いが互いの封印を解くコードを保有している。
「新たな異種族が来るなら私達にも報告は来る筈です。それが無いと言う事は、転校生は普通の方なんでしょう」
「そっかぁ、それだと、ちょっと私達じゃ絡み辛いかなあ」
「当たり前です。私達は遊びでここに居る訳じゃないんですよ」
「うっ、そんなトゲのある言い方しなくても～っ」
監視・警邏・鎮圧。人と異種との間仕切りと呼べる彼女らの様な存在は、こうも呼ばれる。――"ブラインド"と。
そんな彼女達も平時は少女である。怜悧な表情で自らの立場を語るアリスも内心、転校生については気になっていた。澪は言うまでもなくである。
そして間も無く、その時は来た。ガタリ、黒板側のドアから音がして、クラスから喧騒が止んだ。クラス中の視線がドアに集まり、来る待ち人の姿が現れる事を予感させた。
ついに――
「おっはー☆　皆元気～？　あーしはテンションメチャ上げＭＡＸだよぉ！」

――場の空気が、凍った。
「これは、時間停止魔法……」
「違う、違うよアリスちゃん」
ウェーブの掛かった茶髪の髪、ルーズソックス、ハートのネクタイピン、ピンクのネイル、萌え袖のセーター、穴を開けないタイプのイヤリング。決めポーズはウィンクにピースの合わせ技。
華美な着飾りに包まれた転校生のテンションはやや、いや、大概に狂っていた――。
「あーしの名前はぁ、白鉄猟来(しらがねりょうこ)！　気軽にぃ、リョウコって呼んで欲しいな☆」
見れば、生徒に混じる異種族達にもこの世ならざるモノを見ているかの様に、恐れ慄くものが居る。
「名前はカチカチなのに振る舞いフワフワ、凄いギャップだね」
「何、何なのアレは？　違法薬物を使用しているの？」
「失礼だよアリスちゃん、推定無罪って言葉、知らないの？」
失礼なのはお互いに。ひそひそとそんな言葉をやり取りする彼女達はクラスでも後ろの席である。運良く、彼女達の言葉は猟来の耳には届かなかった。寧ろ届いていたら明日にはこの振る舞いも辞めていたかもしれないが。
「皆！　よーろしく～！」
壇上の彼女は大きく手を振る。まばらに始まった拍手が、全体に伝播し大きな拍手となる。
――ともかく、普通を求めた少女、白鉄猟来。彼女の高校生デビューは、異様な熱気と困惑から始まったのである。

ちょっとの普通は好きくない？

その昔、人と怪異達に恐れられた二人組のハンターが居た。
1人は、その両手に長短2種の剣を握り、身体強化魔法も無しに鬼やオークをねじ伏せる女狩人（ハントレス）。
1人は、一丁の黄金銃とトラップで千を超える怪異を鏖殺せしめた男狩人（ハントマン）。
見つかれば逃げ場などはなく。ただか弱き獣の様に狩り殺されるのみ。組織に属しない彼らにストッパーは無い。悪事に手を染めた人間すらも獣と見做し狩り尽くした。
誰が言ったか裏世界の暗黒時代。それで裏側の人類と異種族を敵に回しておいて、彼らはある時忽然と姿を消した。復讐に燃える者たちは、必死に探し回ったが、終ぞ見つからずじまいだ。
だが誰一人として、彼らが死んだからだとは言わなかった。
それでいて男と女。二人が子を成すなどと言う悪夢に魘された怪異は枚挙に暇がない。
故に怪異は恐れる。怪異よりも尚人でなしのハンター達を。ある言葉と共に。
『猟師（ハンター）は、必ず来る。野蛮な獣を狩る為に』

「アリスちゃんに、澪（みお）ちゃんね、よろよろ～！」
「宜しくお願い致します」
「猟来ちゃんも宜しくね」
教室に響く三者の声。女が3人集まれば姦しいと言うが、この場合に限っては内一人のみがやたらに五月蝿いらしい。そんな彼女の席はアリスの隣。つまり猟来、アリス、澪が横並びとなっていた。
ガーリーな出立ちの彼女を前に、アリスは当惑し澪は苦笑いを浮かべていた。今時こんな気合いの入ったギャルは居ない。流石にヤマンバ程ではなくとも、それ位は二人にも分かった。

「……う～ん、白鉄って珍しい苗字だよね」
取り敢えず、何か話しておこうかと澪は考えた。
（ここ最近、無差別な通り魔事件が増えて来てるのに……知らなかっただけなのかなあ）
今この特区はピリピリとした雰囲気に包まれている。知ってか知らずかこの時期に転校してきた彼女の素性を知りたくなったのだろう。
「シラガネ、ってすっごくカチカチネームでしょ？　あーしもあんまり好きくないから、あーしの事はさっき言ったみたいにリョウコで良いよ、てかマジでそっちでお願い！」
「わ、分かったよリョウコちゃん」
「てかアリスちゃんってもしかしなくても外国人!?　お人形さんみたいでメチャかわなんですけど！」
やはり、テンションが高い。澪はマシンガンが如く放たれるワードを傾聴し、彼女の素性についてのヒントがないか探すので精一杯であった。アリスもまた、その光景を静観している。話を振られても――
「はい、そうですが。何か？」
――この通りのつっけんどんである。無愛想が顔に張り付いている様であった。
「やっぱり！　澪ちゃんも初め会った時びっくりしたんじゃない？」
「……そうだね～」
当然ながら、澪はアリスの監視役として派遣された身である為、その出会いにそんな光景はありはしない。どちらかと言えば緊迫した雰囲気が立ち込めていた事だろう。
「……あれ、実はそんなに？」
「いやいや！　びっくりしたなもー」
察しているのかいないのか、猟来はズバズバと曖昧なリアクションに踏み込んで来る。澪は冷や汗を流しながらそれに答えるので精一杯だ。
「私の方が色々と驚きはありましたよ」

「アリスちゃんが？」
「初めて日本に来て――」
「――へぇ、そうなんだ！」
　ターゲットがアリスへと移り、澪はふうと息を継ぐ。彼女は内心でアリスに感謝を抱きながら、アリスを質問攻めにする猟来の姿をまじまじと見る。
（……今話をして分かった。この子、放っておいたら不味い子だ）
　この公立八千ケ丘（やちがおか）高等学校の位置する特区とは、数多の秘密がひしめく場所である。人と異種族の境界線すら曖昧なこの場所で、余計な詮索と言うのは余計な危険を寄せ付ける悪癖に他ならない。
（リョウコちゃんは普通にしているだけなのかもしれないけど、もしも危険な異種族と出会ったりでもしたら――）
　あの態度で何か言おうものなら明日の命は無い。多分すぐ死ぬ。死ななくてもロクな目には遭わない。そんな終わりばかりが見えて来て、彼女は遂に頭を抱えてしまった。
（――守らないと）
　机に落とす自分の影を見つめながら、澪は決意する。破魔師として、彼女は大層な正義感の持ち主であった。
　彼女の決意が正しい物だと証明されるには、そう時間は掛からないだろう。
　なぜならば――
「ふーん、アレが転校生かあ。ギャルって聞いたからてっきりケバくて香水臭い子かと思ったけど。アレなら別に味に問題なんて無いよねー？」
　教室の外には、間伸びした声を発し、半眼の中に猟来の姿を映す1人の少女の姿。久しぶりに来た警戒心の薄そうな生娘に、自然と舌舐めずりをした。ピンク色の小さな唇がしっとりと潤う。小柄な身体に見合わぬ妖艶さだ。
「私の友達（コレクション）になってくれるかなー？」
　その目は、血の様に赤い。更に薄く開いた三日月から逆さの小さな白い三角が二つ飛び出している。

「さ、行こーか。皆」
彼女は、数名の友達を連れ立って教室を後にする。
――日常を侵す危機は、既にそこに迫っていた。